

第4号
令和3年12月23日発行

自主学習通信



～引き出せ！子どもの力！！～

大阪市教育局事務局
第2教育ブロックグループ

令和3年度 第2回自主学習推進チーム会議



令和3年11月29日(月)に第2回自主学習推進チーム会議を行いました。開会にあたり、大畑 都島区担当教育次長から「議論を深く掘り下げていった先にある『自主学習習慣の確立』を意識した議論を期待する。」とご挨拶を頂戴しましたが、まさしく、そのお言葉のとおり、非常に充実した議論を行うことができました。

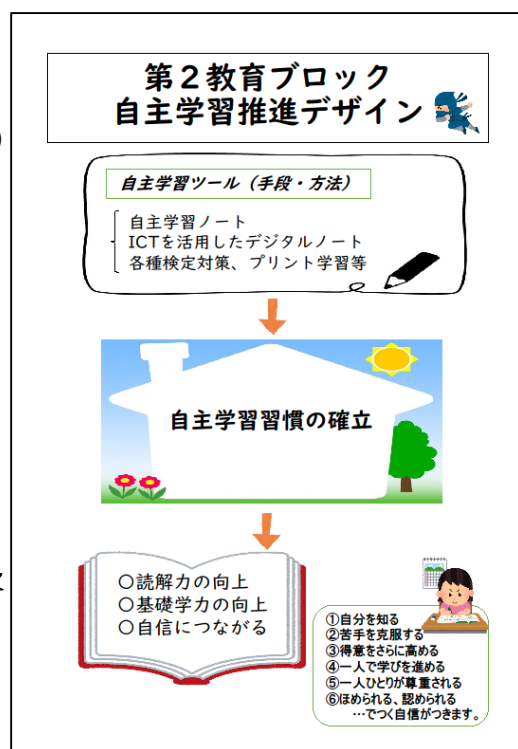
協議開始前に、関目小学校 石井校長先生からは「自主学習習慣の確立に向けて『協働的な学びからのアプローチ』」というテーマでお話をいただきました。自主学習ノートを鑑賞しあうことで児童の活躍の場を増やし、それぞれの表現や感性に触れ合ったり、刺激しあったりすることで、内容や表現方法のヒントを得る機会となっており、次につながる自主学習として高めていくことに有効であるとお話でした。また、自主学習の取組が自校のテーマである「自己肯定感の育成」につながっているとも伺いました。

次に、横堤中学校 井寄校長先生からは、「子どもたち一人ひとりに自主学習を促し、習慣にさせるための『仕掛け』を考えよう。」というテーマで、学生時代に身につけた自主学習習慣が、探究する力や学び続ける力の大切な基盤になるというお話をいただきました。さらに、教員が課題を探究する機会を設定することや、教員がモデルを示して、わずかな時間(5~10分)であっても自主学習に取り組めるということに気付かせることの大切さについても伺いました。

石井校長先生、井寄校長先生、お忙しい中資料のご準備等ありがとうございました。

児童生徒と自主学習をどう繋げていくか

今回の会議では、「児童生徒と自主学習をどう繋げていくか」をテーマとし、「第2教育ブロック自主学習推進デザイン」(右図参照)を設定しました。



1. 自主学習習慣の「定着」「確立」に向けた取組におけるツールの活用

様々なツールがある中で、特に「一人一台端末」の活用方法やその課題について

2. 自主学習習慣の確立に向けた「児童生徒へのアプローチ」、「授業と自主学習の接続」、「保護者との連携」

- 自主学習の取組に消極的な児童生徒へのアプローチや充実期の児童生徒へのアプローチについて
- 自主学習を始められない児童生徒に対する支援となる授業内容等について
- 学習環境づくり等、保護者の協力を得るための学校からのアプローチについて

これらの議題について、各グループに分かれ協議しました。その内容について一部ですがご紹介します。

(1) 自主学習習慣の「定着」「確立」に向けた取組におけるツールの活用について

- ❑ 教員が意図的に一人一台端末を使用する場面を設定するなど、端末が身近なものであるという感覚を持たせる。
- ❑ 端末もノートと同様に「形に残すこと」ができ、「何度も見返すこと」ができるので、今後、積極的な活用が期待できる。



- 端末を用いて探究的な学習や、プレゼンテーションを行うなど、端末ならではの取組も魅力的である。
- 課題として、端末の長時間の使用による生活習慣の乱れへの懸念がある。また、フィルタリング機能により入手できる情報に制限があることや、タイピングが不得意な児童生徒へのフォロー体制の構築が必要である。



(2) 自主学習習慣の確立に向けた

①児童生徒へのアプローチについて(特に中学生へのアプローチについて)

- 児童生徒の目的意識を高めるため、小中連携を深めることは一つの手だてとなる。例えば、小学6年生の児童に対し、中学校の授業につながる自主学習の課題等を提示するなど。(中学校の授業につながる自主学習など)
- 自主学習のテーマを各自で選択し、一人ひとりの取組を児童生徒間や保護者と共有することがお互いの学びにつながる。
- ノート以外のものをポートフォリオのように蓄積していく。
- 今行っている自主学習の目的を明確にし、児童生徒に目的を意識させて、自主学習に取り組ませる。

②授業と自主学習の接続について

- 授業の導入段階で、調べ学習の内容を提示し、自主学習として取り組ませると、調べた内容と授業内容がリンクすることで、より意欲的に学習に臨む姿勢を養える。また、同じテーマであっても、個々に調べる内容が異なることで授業に深まりが生まれ、協働的な学習につながる。
- 意欲が低い、また、取組方法がわからない児童生徒には、昼休みや放課後に個別で指導したり、個々の実態に即したテーマを与えたりするなど、丁寧な対応が必要である。
- 自主学習の取組成果を校内の掲示物と関連付けて、見える形で児童生徒に提示する。
- 授業でnavimaを活用することで操作に慣れ、家庭で自主学習に取り組むきっかけとなる。



③保護者との連携について

- 発達段階において、中学生の時期は小学生の頃と比べると、学習内容等について保護者に話す機会が減る傾向にあるため、自主学習の取組に対する保護者の関心を高めるには、授業参観や懇談会などの行事や、学年だよりや学級通信などの配付物を活用して、学校が積極的に発信することが必要である。
- Teamsのファイル共有機能を活用して、自主学習の取組を保護者と共有する。



このような様々な意見のほか、積極的に自主学習に取り組んできた先生から次のような意見が出ました。

- スタンプ、がんばりカード、表彰といった取組はすでに多くの学校が実践しているが、多くの教員はそのような取組に疲弊しているのではないかと。教員の疲弊感を払拭して自主学習を継続させるためにはどうすべきかを検討する時期にきているのではないかと。

自主学習習慣の定着に向けた取組を第2教育ブロックで始めて2年が経ち、「導入期」から「充実・発展期」へとシフトチェンジの時期を迎えたのではないかと、教員の負担を軽減した形で持続可能な取組の方法を工夫していく必要があるのではないかと、という観点からのご意見でした。

最後に、大畑 都島区担当教育次長から「自主学習の最終目標は、自ら課題意識をもって学ぶ姿勢の育成である。」のご意見もいただきました。次回の自主学習推進チーム会議では、これらの観点を踏まえ、議論を深めていき、第2教育ブロック各校へ情報発信してまいります。

